

アラガミの力...それは女たちの想像を超えたものだった...

アラガミに魅了されていく女たち! ?

ゴドイーター-3異種姦CG集

DEEPRISING

アラガミに魅了されていく女たち！？

CAUTION!

未成年の方の購入・閲覧を禁止します！
画像の無断転載・加工を禁止します！

Reprint is prohibited !

Prologue

すべてを捕食し喰いつくす「アラガミ」の出現により
人類は滅亡の危機に陥った

生化学企業「フェンリル」が開発した兵器「神機」を扱う
ゴッドイーターの誕生によりアラガミに対抗する武器が誕生し
人類に大きな希望が生まれたかに思えた…しかし

人類を襲う新たな災厄「灰域」の発生により
世界をゴッドイーターと共に救うべく戦い続けていた組織
「フェンリル」は崩壊した…

嵐のように全てを襲い全てを喰らいつくし灰へと変える灰域と
戦うために
崩壊したフェンリル本部に属していた軍から新たな組織として
「グレイプニル」が誕生し
人々は各地に「ミナト」と呼ばれる地下拠点を建築

さらに灰域への耐性を持つ新たなゴッドイーター…
「AGE」を生み出したのであった

ミナト「ペニーウォート」

多数のAGEを抱えるミナトのひとつ
利益を最優先とし灰域の調査やアラガミの討伐など
活発な活動をしているミナトとして知られていた

主「……今日も無事に生き延びることができた。」

ミナト地下にあるAGEエリア…
多数のAGEたちが暮らすエリアには全く活気がない

疲れ切った様子で倒れ込み言葉数は少ない…
10歳ほどの子から18くらいまで10名ほどのAGEが
ひとつの檻の中で生活しており

そこは文字通り監獄のように見える

豊満な乳房と引き締まったウエスト…
長い手足に美しく整った顔立ち…
ペニーウォートに所属するAGEの一人
こんな時代に生まれなければ
絶世の美女としてもてはやされたであろう彼女も
疲れ切った表情と汚れた衣服のままベッドへと倒れ込んでいた

「ゴホッ…ゴホッ…。」

体調を崩している少年へと優しく気遣うAGE「ユウゴ」
主人公の幼馴染であり常に助け合ってきた彼は
このミナオに所属するAGEたちのリーダーのような存在であった

体調が悪そうな少年へとユウゴと共に近づきその体を優しく支える
主人公…

そんな彼女たちの様子をまったく気にする様子もない
ペニーウォートの軍人たち…
軍人たちは檻の外から彼ら冷たい眼差しで物のように見下し
それ以上の興味を示そうともしなかった…

ユウゴや主人公も彼らのことは必要以上に相手にはしない
それは相手にされないことを理解しているからだ

このミナトでAGEの扱いはひどく悪い
与えられる食事は最低限、体調を崩しても僅かな薬しか提供されない
例えAGEが死んだとしても…
また新たなAGE適合者を見つけてくればいい
彼らにとってAGEとはその程度の存在なのである

ユウゴ「じゃあ、いってくる。」

ジーク「おまえら大人しくしてるんだぞっ？」

体調の悪そうな少年へと声をかけるジーク…
彼もここで共に暮らすAGEの一人で
口が悪い面もあるが面倒見が良く
過酷な環境で生きる仲間とは強い絆で結ばれている

主人公「うん、二人とも気を付けて…。」

ミッションへと向かうユウゴとジーク

そしてまだ現場で戦えない子たちは訓練へと向かい
檻の中には主人公一人だけが残された…

こんな時に行われることはひとつしかない…

主人公はこれから何が起きるのかを理解しているように立ち上がり格子の前に立つ

まるでタイミングを合わせたかのように扉が開き数人の軍人たちが股間を膨らませて部屋へと入ってきた

「一週間ぶりだな…今日も頼むぜ？」

主「……………」

軍人たちは慣れた様子で少しも遠慮することなく主人公の乳房へと手を伸ばし愛撫し始めた

主「うっ…んっ…っ！？」

パンツの中に手を入れ秘部を弄ばれる

主人公もその状況に慣れている様子でじっと軍人たちの行為を耐え続けていた

「はあ～、やっぱこの体…たまんねえよな。」

「週に一度じゃ…足りねえよ…。」

軍人たちは週に一度だけ主人公の元を訪れてその体を弄ぶ裏から任務や訓練の時間を調整し主人公が一人になる時間をつくっている

軍人との取引で彼らに抱かれることを条件に食料や医薬品などを提供されており体調を崩したAGEの少年も回復に向かっている為に彼らの誘いを断ることができない

主「んっ…あっっ！？」

最初の頃は耐え切れず何度も顔を背けてしまっていた
今でもその気持ちは変わらず軍人たちに対しては
嫌悪の気持ちしか湧いてこなかった

しかし、

主「あんっ…あああああっ!？」

激しく秘部を愛撫されると体が震え自然と喘ぎ声が漏れてしまう
幾度も体を弄ばれるうちに…体は快楽に弱く
受け入れてしまうようになっていた

「ほら、しゃぶれっ！」

軍人の男は主人公の目の前でズボンを下ろす
主人公は嫌そうな顔を見せつつも男に従い
ひざまずき肉棒を口へと迎え入れる



舌先で亀頭を舐め回し
ゆっくりと根元まで喉の奥へと運ぶ

苦しそうな表情を浮かべ嗚咽しそうになる

数えきれないほどに男たちの肉棒をしゃぶってきたが
未だに慣れることができなかった

主「んっ…！？ あはっ…！？？」

口内に溢れた熱い精液…
主人公はその精液をいつものように音を立てて飲み込んでいく

主「はあっ…はあっ…！？」

「ほらっ次はこっちだっ！」

休む間もなく次の肉棒が口内へと押し込まれる

主人公は休むことなく激しく音を立ててしゃぶり続けた…

主「はあ…はあ…はあ…。」

口から精液を溢れさせ疲れた表情の主人公

口で奉仕させた男たちだがまだ満足していない

「こっちに尻を向けろっ…。」

主人公は黙ったまま男たちに背中を向け
ゆっくりと尻を向け突き出す

鉄格子越しに男は肉棒を秘部へと押し当てゆっくりと挿入させていく

主「あっ…ああああっ!？」



肉棒が一気に根元まで挿入され喘ぐ主人公

この鉄格子越しにレイプされるのは最早慣れたもので
格子をギュッと握りしめ自分の体を固定する

男たちも最初はやりにくいと文句を言っていたが
今ではスムーズに腰を振りセックスを楽しめるようになっていた

A G Eの收容されている牢の扉を開くには特別な許可が必要で
任務や訓練以外での外出は厳しく制限されている
さらに普通の人間よりも強靱な肉体を持つA G E…

鍛えられた軍人とはいえその気になれば
簡単に返り討ちにされてしまうだろう

主「あっ…あはあっ…あっ!？」

激しく膣内を刺激され
悶え喘ぎ声を漏らす主人公だが
フェラと同様…いくら慣れたとはいえ
名も知らぬ男たち相手では興奮することもできなかった
喘ぐ声も苦痛から出てしまう声であり
快楽とは無縁といえる

「おおっ、やっぱりお前が一番だっ…! うっでるっ!!!」

鍛え上げられたA G Eの膣内は相当良い物らしく
毎回軍人たちはすぐに限界を迎え射精してしまう

ドクドクと膣内へと溢れていく精液…
その感覚に僅かな快楽を感じながらも…
物足りなさを実感する主人公であった



主「はあ…うっあああ…。」

何度も中出しされ呆然とする主人公

全身に男たちの精液が染みついていた…

男たちは女を犯し満足した様子で立ち去っていく

残された彼女は一人服を脱ぎ全身に染みついた精液を洗い流す…
任務を終えた仲間たちが戻ってくるまでに
痕跡を消さなければならない

犯されることにも大分慣れたが…
彼女自身の性欲は満たされることはなかった
豊満な乳房を大きく揺らし体を洗いながら
自然と自慰行為に浸ってしまう…

仲間たちが任務から戻ってくると
体を提供した見返りにもらった薬品や食料を
子供たちに提供していく…

アラガミと戦い続け…そして男たちに犯される日々…

当然のように続くその毎日が変わる大きな事件が迫ろうとしていた

EPISODE 01

奴隷のように扱われながらアラガミと戦い続けていたAGE
そんな彼女たちに大きな転機が訪れることになる

ペニーウォート周辺にて灰域の活性化現象「灰嵐」が発生し
出撃していたAGEたちは孤立した
ミナトへと救援を求めたが相手にされることはなく
利益だけを求めるペニーウォートは
彼女たちは見捨て自分たちだけで逃げ出していったのであった

そんな絶体絶命のAGEを救出したのは
イルダ率いるキャラバンの一行であった

ミナト「クリサンセマム」の代表であり
同名の灰域踏破船「クリサンセマム」のオーナーであった

イルダ達の手により救出されたAGEの一行たち

ペニーウォートの牢獄の中に見捨てられていた
幼いAGEの子供たちもイルダの仲間の手により救出され
AGE達は仲間を失うことなく全員が保護された

イルダ達は保護したAGEたちを
ペニーウォートでの奴隷のような扱いをせず
人として彼らを迎え入れた

決して優遇されているわけではなかったが
檻の中に押し込まれることもなく
食事や治療を受けられる環境は
AGEの面々にとって
ペニーウォートと比較にならないほど
居心地の良いものであった

当然AGEの面々もただ世話になっているわけではなかった
キャラバンが移動する上で障害となるアラガミの討伐や調査
船内では若いAGEの面々が様々な雑用を手伝い始めていた

クレア「はじめまして、
グレイプニル所属ゴッドイーター
クレア・ヴィクトリアスと申します。」

イルダ率いるキャラバンに乗り合わせていたゴッドイーター
「クレア」
グレイプニル本部へと届けるコンテナの警備を任されていた

非常に真面目で優等生気質な彼女は
主にコンテナ倉庫へと続く通路前に陣取り
侵入者がいないように警備を行っている

だがグレイプニル本部の荷物を奪おうとするものなど
このキャラバンにいるわけもなく
クレアは暇を持て余しているようにも見える

そんなクレアはゴッドイーターとして
そこそこの実力を有しているらしく
AGE達と合同でキャラバンの進路を妨害する
アラガミの排除などの任務に時折参加してくるようになり
次第にAGEの面々とも交流を深めるようになっていった

クレア「よろしくおねがいします。」

主「ええ、こちらこそよろしく、クレア。」

その日、主人公はクレアと共に
キャラバンの進路の妨害となるアラガミを討伐するために出陣していた

討伐目標は数体の小型のアラガミ…
今までの彼女たちの実力から見ても二人で十分と判断された

目的地へと到達した二人は周囲の状況を確認しつつ
討伐対象のアラガミの搜索を開始した

アラガミの反応を追いながら調査を続ける二人…

主「ん？ これはっ…？」

クレア「どうしました？」

主人公は地面に残された痕跡に違和感を感じていた
それはアラガミの足跡に混ざった人間の足跡…
僅かに残されていた痕跡だったが
まだ新しく付近に人間がいることを示していた

クレア「この足跡は…。」

主「誰かが近くにいるみたい…。」

こんな危険地帯に民間人がいるはずもなく
人がいるとすれば、任務中のゴッドイーター以外には考えられなかった

イルダ「ゴッドイーターの痕跡が…？」

クレアたちからの連絡を受け
キャラバンの代表「イルダ」が
オペレーターである「エイミ」へと視線を向ける

エイミ「…現在、その地域でゴッドイーターが活動しているという
報告は受けていませんね…。」

イルダ「そう…。」

他のミナトに所属しているゴッドイーターやA G E達の
可能性が高いと思われたが情報は無かった

しかしどこかのミナトが極秘の調査のために
A G Eを派遣している可能性も考えられる

その場合はミナト間で大きなトラブルや衝突が起きる可能性も高く、
本部の荷物を輸送中のキャラバンとしては
大きなトラブルは避けたいのが心情であった

イルダ「…放っておくわけにもいかないわね、
慎重に周辺の調査を続けてちょうだい。」

主「…了解です、クレアこの痕跡を追ってみよう。」

クレア「わかりました、いきましょう。」

足跡を追い歩き出した二人…
周辺のアラガミを始末しつつ大きな谷間を進んでいくと…
彼女たちの追っていた足跡の主は意外に簡単に見つかった

ルル「うっ…くっ…。」

負傷している様子でうずくまった女性…
その装備と腕輪から彼女がA G Eであることは一目でわかる

主「大丈夫っ？」

クレア「怪我をしているですか？すぐに手当てを…。」

ルルと名乗ったその女性A G Eはどこか様子がおかしい

アラガミと戦った痕跡はあるがひどく怯えた様子であった
A G Eは幼い頃から戦闘訓練を行い
アラガミと戦う肉体だけではなく恐怖心まで克服させられる
彼女の年齢であれば経験も豊富であるはず…

さらに彼女はミナトと連絡を交わしている様子もない…
これはかなり異常な事態と言える

ルル「っ…ここは危険だ…。」

ルルの言った一言…その言葉に二人は
すぐに彼女を連れてこの場から離脱しようとした…
しかし…

3人の離脱を阻止するかのようには複数のアラガミが
周囲を取り囲んだ
ひどく興奮した様子のアラガミ…
明らかに異常事態であった

エイミー「緊急連絡！周辺の灰域濃度上昇…
大型の灰域種アラガミの接近を確認！」

イルダ「そんな…まさか…。」

突然の灰域濃度上昇と灰域種の接近…
その反応は次第にA G E達へと近づき…
既にキャラバン周辺まで灰域濃度が上昇しつつあった

アラガミに囲まれたAGE達は必死に襲ってくるアラガミ達と戦い続けていた

主「くっ、こんな群れて襲ってくるなんてっ!？」

クレア「一体どこにこれだけ隠れて…っ！」

ルル「わ…私はっ…っ…。」

ルルを守るようにアラガミと戦う主人公とクレア
倒れ込んでいたルルも必死に体を起こそうとしていたが
体が震え言う事を聞かないようだった

主「だ…だめ、数が多くてこれ以上はっ！」

クレア「このままじゃ…きゃああっ!？」

複数のアラガミに同時に襲撃され
守り切れなくなったクレアの横をすり抜け
アラガミ「シュウ」が軽やかな動きでルルへと迫った

ルル「いっいやあっ…!？」

シュウはルルの背後から回り込みその体に抱きつくように
抱え込んだ

そして…

ルルに襲い掛かったシュウはすぐさま肉棒を
彼女の膣内へと一気に押し込んでいった

ルル「あああああああっ!!!??」



激しく揺さぶられ悶えるルル

主人公とクレアは一体何が起こったのか理解できなかった
AGEの仲間が攻撃を受けている...
しかしどんな攻撃なのか理解できなかった

涙を流し喘ぐルルの表情を見て
彼女が苦しんでいるということだけがわかる
二人はすぐさまルルを救出するために武器を構え接近した

だが…

接近したところで何が起きているのかを理解してしまった

主「ええええっ!？」

クレア「な…なんでアラガミがっ…!？」

目の前で起きていた人間とアラガミの激しい交尾…
目を丸くしたまま絶句し言葉が出てこない…

同時にルルが負傷し怯えていた理由がわかった
人間を襲いレイプするアラガミから必死に逃げていた

二人の背筋が凍るように冷たくなり顔色が青くなる…
自分たちを取り囲んでいるアラガミ達…
オウガテイルなどごく見慣れた雑魚アラガミだったはず
しかし…

その股間から伸びた勃起した肉棒
アラガミたちが交尾目的に自分たちに襲い掛かっていることを
理解してしまうと…
二人の体は恐怖で震えだした

主「まさか…こいつらの目的って…私たちの体？」

クレア「じょ…冗談じゃありませんっ…
そんなこと認められないっ!!」

主「待ってクレアっ!？
うかつに飛び込んだら危険よっ!」

クレアは襲われているルルを救出しようと駆け出した
だが…

クレア「きゃああああっ!？」

冷静さを失った彼女の直線的な動きに
オウガテイルは横から体当たりし
クレアは大きくバランスを崩して吹き飛ばされる

そして…

クレア「うっ…あっ…。」

動きだけではなく攻撃力までも上昇しているらしく
クレアは予想外の大ダメージを受けている
まだ立ち上がることができないクレアへと
オウガテイルは一気に接近し

クレア「えっ…なにっ…ひあああっ!？」

巨大に伸びたオウガテイルの肉棒がクレアの秘部へと
押し付けられ…じわじわと膣内へと入り込んでいく

クレア「いやあああ、中に…入ってきてるうっ!??」



激しい腰の動きでクレアの膣内の奥まで肉棒は挿入された
クレアとルルの二人は
はじめての経験をアラガミに奪われ弄ばれる

ルル「うあああああっ…ああああっ！！！」

クレア「いやあああああああっ！？」

主「あっ…あああっ…。」

アラガミに犯される二人の姿を見て体が震える主人公
前の前で起きている光景は現実のものとは思えなかった

恐怖に怯え二人を助けることも逃げ出すこともできない
鼓動が早くなり全身が熱くなっていく

そんな時、彼女の周囲のアラガミ達が突然怯えだし
その背後から巨大な姿をした新たなアラガミが姿を見せた

主「こ…こいつは…。」

主人公はその正体を掴めなかった…
だがその全身から溢れるオーラと圧倒的な風格
それが灰域種アラガミ「ラー」であったと知るのは後のこととなる

主「きゃああああっ！？」

ラーの不思議な力により体が浮かび上がり
その元へと引き寄せられる主人公…
ラーは他のアラガミと同様激しく興奮した様子で
その股間からは巨大な肉棒が反り立っていた

主「ひいいっ…そんなっ…無理っ…！？」



ひいっ...!!
太いのが...私の中...!!
ああああっ、気持ちいいっ!!

その大きさと形に怯える主人公
だが彼女がどれだけ怯えようとラーが気にかけることはない
肉棒は秘部へとグッと押し付けられ
膣内へとじわじわと挿入されていく

主「ひあああああああっ!????」

全身をビクビクと震わせ歯を食いしばり必死に耐える主人公
巨大な肉棒が腹部を押し上げる度に
彼女の体は大きく揺れ動く

主「あっ…あはああああっ！？ だめっ…こんなのってっ…！？」

敵対するアラガミに交尾対象として弄ばれる
耐えがたいほどの屈辱であった…
しかし…彼女の中に芽生えた不思議な感覚…
苦痛のはずなのに、心の奥で感じ始めた快楽

AGEとして選ばれ奴隷のように体を弄ばれ続けてきた
あの時には感じられなかった快楽と興奮…
そう、彼女は今時分が興奮しているという事実気付かされた

主「あああっ！？ 激しいっ…奥まで入ってるうっ！！」

肉棒が奥まで挿入されると全身に電気が走る…
愛液が溢れ周囲に激しく飛び散っていた

クレア「あああっ…お願い…もう…やめてっ…！！」

ルル「あっ…あああああっ…。」

オウガテイルとシュウに犯され続けていた二人は
もはや限界であった…

主人公とは違い…処女を奪われた彼女たちは
より強い屈辱を感じプライドはズタズタであった

はやくこの苦しみから逃れたいという思いしかない…
だが…

クレア「うそっ…やめて…中には出さないでっ！！！！？」

ルル「な…なかに出てるっ…ああああああっ！？？」

アラガミ達が膣内へと射精を開始すると
二人の体はビクビクと痙攣し
大量の潮を噴き上げた

クレア「あはああああああっっ!？」

ルル「うっ…ああああああああっっ!？」





二人はぐったりとしたまま放心してしまった

アラガミの射精は数度にわたり彼女たちの子宮へと
精液を流し込み
その度にクレアとルルの体はビクビクと痙攣する

主「ああ…クレア…ルル…っ…！？」

主人公の目の前で犯された二人…

その様子にさらに興奮し愛液を溢れさせる主人公

主「あああ…もっと…もっと激しくっ…。」

無意識のうちに口から出た言葉は
さらに快楽を求める言葉であった

主人公の頭の中は真っ白になり何も考えることができない
理性を捨てただ本能的に快楽だけを求め始める

主「あああああっ…あはああっああああんっ！????」

悶え喘ぐその姿は

ペニーウォートのミナトにいたころ
男達にどれだけ体を弄ばれようと決して見せなかった
乱れた女の姿であった

主「あはあああああっああああっ！??」



大量の精液が射精され体をビクビクと痙攣させた後意識を失った主人公…

ユウゴとジークが3人を救出したのはそのすぐ後であった…

EPISODE 02

アラガミに襲われた主人公、クレア、ルルの3人は
医務室で検査を受けていた

ユウゴとジークの手により救出されたが…
その惨状は悲惨なものであった

ユウゴ「…。」

ジーク「……………あの二人が負けるなんてな…。」

主人公とは長い付き合いのある二人…
クレアとも幾度もミッションを共にしてその実力は
把握しているはずだった

ジーク「灰域種が相手だったとしても…。」

ユウゴ「ああ…一体何があったんだ…。」

「肉体的な問題はほぼありませんでした…
ただ精神的なものは…。」

イルダ「そう…ありがとう。」

医療担当から報告を受け考え込むイルダ

イルダ「あの状況…聞いたことがあるわ…。」

過去に知り合いから聞いた噂…
極東で出現した、女を襲い犯すアラガミ「発情種」の噂…
ただの噂だと思っていたが
主人公たちの状況はまさにその被害者と同じ状況であった

幸いにも救出を担当したユウゴたちは
その情報を知らず主人公たちが未知の灰域種のアラガミに
襲われたという認識しかなかった
半裸となり乳房丸出しになった女性たちの扱いには
かなり困っていた様子ではあった

発情種となったアラガミは無差別に女性を襲い繁殖行為に及ぶ
しかしアラガミが射精する精液はあくまで
他の生命体のものを真似て生み出された偽物であり
本物の精液とは違うものである

しかし…その精液には対象を発情させる効果もあり
歴戦のゴッドイーターであっても
2～3度犯されればその快樂の虜となってしまう…と
フェンリルが崩壊した今となつてはその詳細を調べることもできない
極東のG Eたちが殲滅させたとの噂もあったが
この地で新たに発情種が発生したとなれば
グレイプニル本部さえ崩壊させかねない事態となる…

イルダ「この状況じゃ…A G E達を任務に出すこともできない…。」

噂によれば被害に合うのは女性のみとされているため
当面は男性A G E達の出撃しか認めないこととなった

数日後…アラガミに襲われた3人はなんとか立ち直り
現場の復帰を求めてきた…

クレアは本部の荷物警備という危険が無い任務の為に認められたが
主人公とルルの二人は認めらえることは無かった

ルルはミナト「バラン」出身のA G E
バランにて開発が行われている
戦闘支援システムの被験者として選ばれ現地にて任務中であつたが

灰域濃度の上昇と発情種のアラガミの出現により
ミナトより見捨てられ戦場で孤立し動けなくなつていたという
さらにバランはルルというA G Eの存在さえ認めようとはしなかつた…

イルダはそんな彼女を迎え入れることを決めていた
AGEという戦力を放っておくこともできない
それ以上にアラガミに襲われ弄ばれた一人の女性を
危険な地域に見捨てることなどできなかったのだ

ルル「まだ任務に出撃することは…許可されないのか。」

クレア「あんな目にあつたのに…ルルは強いですね…。」

主「…はあ…。」

クレアの警備地点…

コンテナ倉庫の前で集まった3人

ルルは任務へと再び向かう意欲をみせていた

犯されたばかりのクレアはまだその力が湧いてこない

ルルもまだあのトラウマが頭から消えていなかったが

キャラバン内でただ茫然としているよりも

任務へと出て体を動かしていたほうが気が楽だと思っているようだった

クレア「それは…そうかもしれませんが…。」

ルル「クレアもきっと…任務に出たほうが気が楽になると思う。」

クレア「……うん…。」

ゴッドイーターである以上、いつまでも引き籠っていることもできない
輸送の任務を完了するまでまだ多くの戦いが待っているはず

所属していたミナトから事実上追放され見捨てられたルルは

ゴッドイーターとして戦えなければ

また見捨てられるのでは…という恐怖心を心のどこかで抱いていた

主「また…任務に出たら…きっと私は…

アラガミたちにあんなことをされて…ああっ…!？」

二人の目の前でおかしな体をくねらせ顔を真っ赤に染めた主人公

何やらおかしな事を妄想して興奮しているようだった

クレア「……。」

ルル「だ…大丈夫？」

主「…はあ…はあ…ええ…問題ないわ…。」

冷静になったのか二人の方へと視線を向ける主人公
しかし顔は真っ赤に染まったままであった

主「たしかに…イルダさんにお世話になっている以上、
ゴッドイーターとしてお役に立ちたいですね。」

クレア「ですよ…、私もはやく立ち直れるように努力します。」

アラガミに襲われた3人に僅かながら絆ができはじめていたようだった

そんな時…キャラバンに新たな事件が発生することになる

エイミー「…緊急連絡！強いアラガミの反応…
これは…灰域種！？」

イルダ「なんだと…こんな時にっ…！？」

キャラバン内部に響く警報音
代表のイルダは困惑している

被害にあったばかりの女性AGE達を任務を出すわけにもいかず
今は男性AGE達…ユウゴやジークが任務へと出ている
ルルは任務復帰を望んでいる様子だったが
まだ彼女たちを出撃させるわけにはいかない…
ここでまたアラガミ達に凌辱されれば
二度と立ち直れないほどに追い詰められてしまうかもしれない

それだけは避けたい事だった…が
今は彼女たちの力を借りるしか道は無かった

主「すごい衝撃っ…!？」

クレア「…まさかコンテナが教われてるっ!？」

灰域種アラガミはキャラバンの後方から接近し
コンテナへと攻撃を仕掛けているらしい
大きく揺れるキャラバンにバランスを崩す3人

ルル「コンテナの中には何が…?」

クレア「私も…中身までは知らされていません…。」

主「とにかく…確認しないとっ!」

3人は神機倉庫へと向かい整備された愛用の神機をかつぐと
急いでコンテナ倉庫へと走り出していった

主「えっ…これは…っ!？」

クレア「…少女っ…!？」

ルル「なんで女の子…?」

コンテナは大きくアラガミにより引き裂かれ天井部分が
既に無くなっていた

そしてコンテナの中を覗き込む大型のアラガミ
灰域種と思われる存在と…
コンテナの中央でアラガミと見つめ合うように座る少女

その少女は頭から角が生え人間にはない特徴を持っていた

主「まさか、アラガミなの…?」

人間の姿をしたアラガミ…
その存在に驚愕する3人…

そして…少女とアラガミの間に立つ一人の女の姿…

それは…かつて極東の地で名を馳せたゴッドイーター…
「アリサ」であった

主「……………」

一目見て彼女が敵ではないことがわかった
アラガミの少女…「フィム」を守るように
神機を構える姿は強い決意と自信に満ちているようだった

アリサはフィムの体を抱えると
素早い動きでキャラバンから脱出し姿を消してしまった
同時に巨大なアラガミもアリサたちの後を追うように
その場から立ち去っていった

クレア「一体何が起きたのですか…？」

ルル「あの二人を追ったように見えただけ…。」

主「…とにかく…後を追うしかないわ…。」

本部から預かるコンテナの中身が少女であることを知った
イルダはその情報に驚きを隠せない様子だった
後を追うことを強く主張する主人公たちだったが
イルダは彼女たちがまた危険な目に合うのではと…
心配している
だが本部の荷物を逃したまま何もしない訳にもいかない

イルダ「仕方ない…出撃を認める…
だが、危険だと判断した場合はすぐに撤退させる。」

「「わかりました。」」

3人はイルダの言葉を受けアリサとフィムの後を追って
出撃したのであった

アリサと…その後を追った大型灰域種アラガミの痕跡を辿り
進み続ける3人…

巨大な足跡が残されているために追跡するのは難しいことではなかった

小高い丘の上にアリサとフィムの姿があった

どうやって灰域種のアラガミを追い払ったのかは不明だったが
アリサは当然主人公たちが追ってくるだろうと考えたのか
待ちくたびれた様子だった

アリサ「遅かったですね…。」

主「あ、あなたは…？」

アリサの正体を知らない3人は警戒した様子だった

フィム「…うん？」

連れ去られた少女は何が起きているのか解らない様子だったが
アリサに手荒に扱われた様子もなく
主人公の顔を興味深そうに見つめ笑いかけてきた

主「…。」

その愛らしい姿に主人公も笑みを返す

3人はアリサから今回の行動を細かく説明された

フィムと名付けられた少女が人型のアラガミであり
他のアラガミを引き付ける能力があるということ…

このままグレイプニル本部へと輸送されれば実験体として
利用されおそらくは命までも奪われるだろうということ…

かつて極東にも同様の人型アラガミが発見され
アリサはその子と非常に親しい友人となり
今回の一件を聞きつけ知り合いから協力を求められたという

主「知り合い…ですか？」

アリサ「ええ、今はミナトの代表をやっていますが…
そのことはあまり聞かないようにお願いします。」

アリサたちには独自の情報網があり
関係者に危険が及ぶことを警戒しているようだ

ルル「つまり…敵ではないと…？」

アリサ「ええ、ずっと様子を見ていたんですけど
灰域種が急に襲い掛かったので…
やむを得ず介入してしまいました。」

アリサは自分の行動が軽率だったと反省しているらしく
謝罪の言葉を3人に向けてきた

クレア「でもまさか…荷物が…この子だったなんて…。」

じぶんが警護していた荷物がアラガミ…
一人の少女だと理解しショックを受けたようすのクレア

主人公へと懐き慕う様子は普通の少女にしか見えず
アラガミと戦い続ける彼女たちには大きな癒しとなった

アリサの言う言葉を完全に信じることはできなかったが
フィムが本部へと連れて行けば…
おそらくアリサの言う通り実験体として利用されるのは間違いない…
フェンリルから続くグレイプニル…そういう組織なのは
奴隷扱いされた主人公や見捨てられたルルには
よく理解できるものだった

ルル「でもこんな危険な事をするなんて…正気とは思えない。」

クレア「たしかに…あんなの命がいくつあっても足りませんよ。」

主「……。」

灰域種のアラガミを引き付ける行為など危険極まりない
しかし…アリサには絶対に襲われないという自信があるようだった

アリサ「…あなた…私と同じ目をしていますね…。」

主「えっ…わたしっ…？」

アリサに顔をじっと見つめられ頬が赤くなる主人公
そういった趣味は持っていなかったが
胸がドキドキしてきたために
その視線に耐え切れず目を反らしてしまう

フィム「……。」

目を反らした先にはフィムの顔があり
興味深そうにこちらを見つめていた

イルダ「状況は解った…

だが本部からの荷物を渡すわけにもいかない…

ひとまず客人とともにキャラバンへ案内をしてくれるか。」

主「了解です、…アリサさん、ひとまず私たちと一緒に来てもらえる？
いろいろと話を聞きたいし。」

アリサ「ええ、構いませんよ…ただ…お客が来てしまったようですね…。」

主「えっ…！？」

ルル「アラガミ反応が多数…！！」

クレア「この子がアラガミを引き寄せるというのは…
やはり本当のようですね。」

複数のアラガミ反応に対しアリサは冷静であった

アリサ「ここは私に任せてその子と隠れていてください、
ちょっと時間はかかりますが…心配はいりません。」

そういうとアリサは主人公たちの元から離れて
アラガミの元へと向かっていった

アリサがベテランのゴッドイーターであることは
一目見るだけで理解することができた
ここにいる誰よりも経験豊富な実力者なのは間違いない

クレア「だけど…一人で本当に大丈夫なんですか？」

心配したクレアと主人公はアリサを手助けするために走り出した

ルル「……。」

フィム「…………。」

残されたルルとフィムは無言のまま見つめ合った
愛らしくほほ笑むフィムは人懐っこい様子だ
感情をあまり表に出さないルルだが
その笑みを見て頬を赤く染め口元が緩む

主人公とクレアがアリサの元へと駆けつけた

アリサ「あっ…はああんっ…!!??」



そこには…アラガミ「ハバキリ」の上に跨り
喘ぎ悶えるアリサの姿があった

アリサ「あぁっ…いいっ…奥まで届いてますっ！！」

自ら腰を振り続けるアリサ
二人が見ている前で幾度も潮を噴き上げていた

クレア「ア…アリサさんこれは…？」

怯えた様子のクレアと

主「こ…こんなのことしているなんて…！？」

顔を真っ赤に染めもぞもぞと体をくねらせる主人公
快楽に浸るアリサが羨ましくて堪らないようだ

アリサ「あぁ…見られてしまいましたか…
お二人も一緒にどうですか？」

主「で…でわ…お言葉に甘えて…。」

体を震わせながらアリサへと使づいていく主人公
溢れる性欲を抑えきれない様子だった

クレア「えっ…ちよつとっ…えっ…！？」

その場で服を脱ぎハバキリの元へと歩み寄る主人公…

何がどうなったのかわからず混乱するクレアだった

主人公はアリサと入れ替わり普通にハバキリの反り立った
肉棒の上へと腰を下ろしていく…

主「あはぁぁぁっ！？」

アリサと主人公…

アラガミとなんの抵抗もなく求めあうその姿に呆然とするクレア…
だが…体の奥が…熱くなってくるような不思議な感覚に襲われた

クレア「なんなの…体が…っ…。」

呆然とするクレア…そんなクレアの背後から新たなアラガミが
迫りつつあった

クレア「ひいっ…！？」

クレアへと擦り寄ってきたアラガミ…
決してクレアを傷つけるようなことはなく敵意はない

しかし…

その体から伸びた物体…おそらく肉棒が
クレアとの交尾を強く求めているようだった

ルル「……。」

フィム「……えへへ。」

ルルの周囲を回る楽しそうなフィム
ルルはその笑顔の虜となっているようで今まで見せたことの無い
温かいまなざしでフィムを見つめていた

フィム「うん？」

ルル「あ、クレア…なにかあったの？」

フィムと遊んでいたルルの元にクレアが必死の形相で走ってきた

クレア「ルルッ…アラガミがっ！？」

ルル「えっ…！？」

クレアの後を追って複数のアラガミが姿を現した
マイナスパイダーにアックスレイダー…
この地域ではごくありふれたアラガミばかりであったが…
全てのアラガミが女を求めて発情し大きな肉棒を反り立たせていた

ルル「ひいいっ!？」

フィム「…??」

アラガミに弄ばれた経験のあるルルはすぐに危機を察知し
怯えた様子であったが
フィムは何が起きたのかよく理解していない

クレア「きゃああああっ!？」

ルル「いやっ…また犯されるなんてっ!!!？」

マイナスパイダーに飛びつかれたクレア…
口から飛び出した粘着性の糸に拘束され
体の自由を奪われ…すぐに勃起した肉棒を挿入された
さらに
アックスレイダーに押し倒されたルルはすぐに
肉棒を膣内へと挿入されてしまう





一度アラガミに弄ばれた経験がある二人の体は
肉棒を簡単に受け入れスムーズに交尾がはじまった

肉棒で突かれ激しく揺さぶられる二人…

そんな二人の様子をフィムはよくわからないといった表情で
見つめていた

ルル「ああっ…ダメそんな激しいっ…!!」

クレア「フィム…みちゃだめっ…!？」

フィムはじっと二人の様子を見つめている

フィム「…きもちいいの？」

クレア「ち…ちがいますっ…これはっ…ああああっ!？」

ルル「きもちよくなんて…うううっ!？」

激しく肉棒で突かれ悶える二人…

一度アラガミに犯された経験からなのか
二度目はそこまで苦痛は感じられなかった

まるで彼女たちの体に変化しアラガミとの交尾に適応しようとして
しているかのように…

クレア「あはああああああっ!？」

ルル「ああああああああっ!??？」

大量の潮をフィムの目の前で噴き上げてしまった

フィムは目を丸くして驚き尻もちをついてしまっていた

フィム「すごい…たくさん…でたね?
やっぱり…きもちいい？」

クレア「ち…ちがいます…っわたしは…。」

フィム「でも…わらってるよ？」

クレア「えっ…!？」

クレアはいつの間にか自分が笑みを浮かべていることに気付かされた
さらに隣ではアラガミに犯されていたルルも
口元に笑みを浮かべて何度も潮を噴き上げている

フィム「楽しい？」

クレア「たの…しい…？」

激しく肉棒で突かれる感覚…

それが全身快楽であることをようやく理解できた…

フィムの言う通り…

自分は今アラガミに犯されることを楽しんでいる…？

そんなはずはないと頭で否定したが…

クレア「あはあああんっ…すごいっ…!？」

ルル「うううっ…だめっエ…またイっちゃうっ!??」

ルルは既に限界に達しているようだった

ルル「あはああああっあああっ!？」



アラガミに射精され大きく膨らんでいく腹部

ルル「うっ…あああああっっ…。」

ルルはビクビクと痙攣しそのままぐったりと全身の力が抜け意識を失ってしまった

クレア「あっ…ああああっ…ダメ…私ももう限界っ…!??」



クレア「ひあああああああっ!??」

大量に中出しされルルと同じように腹部が妊婦のように膨らんだクレア…

その時クレアが感じていたのは…すさまじいほどの快樂

意識が朦朧とする中…

興味深そうに自分の顔をのぞきこんでいたフィルム…

笑みを浮かべるその愛らしい顔に…

クレアもそっと笑みを返し意識を失ったのであった…

EPISODE 03

イルダが代表を務めるミナト「クリサンセマム」を
出発する一行…

コンテナの中身がフィルムだったと知った…
あの日から既に10日が過ぎていた…

アラガミ達に襲われ犯されてしまったクレアとルル
ぐったりとしたままキャラバンへと
アリサと主人公により担ぎ込まれた

二人は前回より早く立ち直ったが
それでも受けたショックは大きかったようだ

ルル「…まさかこんなに私が淫乱な女だったなんて…。」

クレア「私の体一体どうなっているのでしょうか…。」

アラガミに犯されたあの時…
間違いなく快樂に身を任せてしまった自分…
それが今でも信じられなかった

二人を担ぎ救出したアリサと主人公は
フィルムと一緒に楽しそうに遊んでいた

フィルムの正体はまだ不明な点が多く本部からの連絡も
詳細は濁したままであった

だがこうして遊んでいるフィルムの姿を見ていると
必要以上に心配し警戒する事はないだろうと
オーナーのイルダも安堵しているようだった

アリサはイルダのキャラバンにそのまま同行し
フィムの監視管理を本部から要請された

彼女は以前に極東にて確認されたアラガミ「発情種」
人間の女性を交尾目的に襲うアラガミの調査を
旧フェンリル時代からの特命として現在も続けていた

彼女以外にも数名がこの任務を受けて各地で調査を行っており
アリサの知識は発情種再発生という異常事態において
非常に期待される…

彼女曰く…

発情種は極東において一度殲滅されたとされていたが
ごく少数が各地で
通常のアラガミから進化する形で発生していたという

しかし、これだけの大発生は極東で殲滅されて以降
はじめての事態でありアリサたちも困惑している状況だという

しかも…

アラガミ達は以前よりも遥かに人間の女性へと扱い方がうまくなり
経験豊富な自分でもすぐにイカされてしまうと…
顔を真っ赤にして語っていた

アリサ「アラガミ達は確実に進化しています…
私の体も…いつまで耐えられるか…。」

主「…アラガミ達がそんな大発生しているなんて…。」

身を悶え顔を真っ赤にして自分の股間と乳房を揉み出す
アリサと主人公…

その二人の間にいたフィムも真似して体をくねくね動かして遊んでいた

イルダ「ふう…さてこれからが大変だな…。」

椅子へと座り考え込んでいるイルダ
彼女には大きな試練が待ち受けている

他のミナトに所属しているAGEたちの問題…
既にキャラバンの面々とも打ち解け貴重な戦力として
必要不可欠な仲間となっている主人公たち
しかし
ペニーウォートの代表が権利を主張すれば
彼らはまた非道な仕打ちを受けることになるだろう…

そんな事は許すことができなかった

なんとしても彼らを保護し自分たちの仲間として
これからも守っていききたい…

そして
本部から預かっていた荷物である「フィルム」の処遇…

フィルムがアラガミであったとしても
その内面は普通の少女となんら変わらないことは
キャラバンの面々と交流する様子から既に判明している
アラガミを引き寄せる能力という危険が潜んでいるが
その能力は上手く活かせば今後の作戦を効果的に遂行する力になり
能力を調整することが可能となるかもしれない…

まだ不明な点が多く慎重に調べていくべきだ

だがもし本部へと引き渡してしまえば…
おそらくフィルムは実験の末に命を奪われてしまうことは
間違いない

彼女がアラガミとの戦いにおける
大きなカギとなる可能性をイルダは感じていた

イルダ「だからこそ…

何としてもフィムは今後も我々の元に置いておきたい…。」

エイミー「…気持ちはわかります…がそんなことが可能でしょうか？」

不安な表情を浮かべるエイミー

そんな勝手に許されることがないことはイルダも理解していた

イルダ「だから…何としても味方を増やしておく必要がある…。」

エイミー「味方…他のミナトのオーナーたちですね？」

イルダ「そうだ…彼らを味方につけることができれば…
会議の場で有利になる…。」

本部からはミナトのオーナーたちに召集命令が出ている

その場で大会議が行われ、今回の事態が話し合われることは間違いない
だからその会議にまでに何としても味方を増やしておく必要がある

イルダ「すでに何人かのオーナーに連絡済みだ…

彼らには貸しがあるので問題なく手を貸してくれるだろう…。」

エイミー「ですがそれだけでは…。」

イルダ「うむ…問題は…奴らだな…。」

イルダ達を穏健派と例えるならば

フィムを利用としているのは過激派と言える

主人公たちの所属しているペニーウォートや

ルルが所属していたミナトなどがあたる

過激派の説得はもはや不可能でありAGEやフィムの件で
どんな言い掛かりをつけられるか知れたものでは無い

イルダが味方に付けようとしているのは
どちらにも属さない中立派…
状況によりどちらにも転がり歩み寄る者たちで
イルダが最も嫌っているオーナーたちだった

イルダ「だが餌を与えれば…奴らは簡単にこちらにつくだろう。」

エイミー「その餌…とは…。」

イルダ「私だ…。」

エイミーは…やはり…といった表情であった

中立派にあたるオーナーの数人は
以前からイルダに関係を求める好色な男たち
イルダから話を持ち掛ければ間違いなく乗ってくる…

裏切りが心配されるが
イルダが選んだのは少なくとも自分を裏切る心配がない
確実に味方となる者たち…
彼らを味方につければ今後優位に立てるのは確実に…

イルダ「彼らは命をかけて戦っている…
私も彼らの期待に応えなくてはな…。」

エイミー「なら…わたしも…イルダさんの力になります…！」

イルダ「な…何を…。」

エイミーはイルダの背負った重荷を自分も共に背負うことを
決意していた

それは…男たちに弄ばれることとなるイルダ…
その負担を少しでも減らすために自分も体を捧げるという決意だった

「おお、本当に来られたのだなイルダ殿！」

イルダ「ご無沙汰しております…。」

「ほお、連絡に会った通り…エイミーさんも御一緒とは…！？」

エイミー「どうも…。」

イルダの連絡により集められた4人の男…
どれも中年以上の男たちで
イルダ達の体をいやらしい視線で見つめていた

非常に不愉快な気持ちを抑え…イルダは男たちと歩き出す

「ではエイミーさんは…私と来なさい…。」

エイミー「は…はいっ…。」

不安気なエイミーだがもう引き返すことはできなかった

本部へと続く航路にあるとミナト
そこで中立派のオーナーたちとの会談の場を用意した

オーナーたちは待ちきれなかったといった様子で
すぐにミナトへと集合し…
イルダ エイミーと顔を合わせた後

すぐに寝室へと彼女たちを連れ込んだのであった…

イルダ「んっ…っ！」

3人の男と

部屋に入るなり男に抱き着かれ激しくキスされるイルダ
事前に連絡していた通り…一切抵抗はしない…

男の舌が口内へと入り込みかき回す

イルダも戸惑いながらも舌を絡ませはげしい音を立てる

「おお、たまらん…ようやくこの体を抱けるとはっ！」

イルダ「約束をお忘れなく…。」

「もちろんだ、決してイルダ殿を裏切ったりはせんよ。」

男たちはイルダの体を撫でまわし

その豊満な乳房を背後から激しく揉みしだく

イルダ「うっ…ううっ…!？」

乳首をつままれ悶えるイルダ…

「さて…ここも拝見させてもらおうかな？」

イルダ「あっ…あああっ!？」

下着をずらされ秘部をじっくりと観察される

男たちに弄ばれている…

耐えがたい程に屈辱だったが

AGEたちはアラガミにもっとひどい辱めを受けてきた…

イルダは彼女たちのためにぐっと耐え続ける

イルダ「きゃあっ!？」

「さあ、そろそろ本番と行こうか…足を広げなさい。」

イルダ「……はい……。」

ベッドへと押し倒されたイルダ…

男たちに向け両足を開き…男がその間に入ってくる

イルダとのセックスを前に男は興奮が抑えきれないようだ
肉棒をすぐにイルダの膣内へと挿入させ
激しく腰を振り始めた…

イルダ「あっ…あああああっ!??」



ううっ…ああああ!!
そんな…激しくしないでっ…
あああっ…!!

エイミー「きゃあっ…!？」

イルダとは別の寝室へと連れ込まれたエイミー
その前には服を脱ぎ全裸となった男の姿があった

目の前にある勃起した男の肉棒を見て
思わず悲鳴を上げてしまっていた

「ほう…もしかして処女なのかね？」

エイミー「いえ…そうではありません…。」

「ワシの大きさを見て驚いたのか…無理もない。」

目の前で勃起した男の肉棒は想像以上に大きなものであった

男にベッドへと連れられ尻を突き出したエイミー
形の良い尻に食い込んだ白いレース付きの下着の上から
男はじっくりと撫でまわしゆっくりと下着を下ろす

エイミー「ひっ…あああああっ!？」

男は秘部に吸い付き舌で舐め回す

ビクビクと全身を震わせ悶えるエイミー
処女ではないと強気に出たエイミーだったが
今まで男に体を触らせたことも一度もなかった

仲間たちのため…イルダの為に歯を食いしばり男の
行為に耐えるエイミー

エイミー「あはああっああああっ!？」

生まれて初めて潮を吹いたエイミー…
僅かに攻められただけで限界を迎えてしまった

「ほう…いい反応をするのう…。」

男もエイミーが処女であることを既に察したのか
さらに激しくエイミーの秘部を弄んだ

エイミー「あっああああっ…だめええっ!??」

男に弄ばれたエイミーは既にぐったりとベッドに横たわる

全身に力が入らず…抵抗する気力も沸いてこない
今まで感じたことのない感覚に襲われ頭の中は真っ白になっていた

男は抵抗しないエイミーの尻を抱えゆっくりと肉棒を
膣内へと挿入させていく…

エイミー「あぁっ!? はいって…きてるっ!?!」



処女膜をつきぬけ男の肉棒は根元まで収まっていた

苦痛に顔を浮かべ涙を流すエイミー…

男はそのまま腰を激しく振り出し
エイミーの乳房が大きく揺れ動いた…

エイミー「あっ…あぁっついやっ…痛いっ…！???」

男の激しい腰使いに苦しむ
ただ苦痛しか感じられず男がこれほど興奮している
理由さえわからなかった

エイミー「あっ…あぁあぁあぁっあぁっ！？」

イルダ「うっ…ううっ…あはあっ！？」

隣の部屋では激しく乳房を揺らしているイルダの姿がある

左右から差し出された肉棒を必死に啜える

エイミーのような処女ではなかったが
男性経験は少なく乱交したこともなく
慣れない様子で必死に肉棒をしゃぶっていた

イルダ「あぁっ…そんなに激しくしないでっ…！？」

肉棒の攻めに悶えるイルダ
考えてみればミナトの責任者となってからは誰とも
夜を共にしたことがない…
セックスを忘れ仕事に集中しすぎていたのか
彼女の体は快樂に対して弱く…もろくなっているようだった

イルダ「あはあぁあぁあぁっ！???」

快樂に負け大量の潮を噴き上げてしまった
最も嫌っていた男たちに弄ばれ
その肉棒に屈してしまうとは屈辱であった

しかし…

イルダ「こ、こんなに気持ちいいはず…ないのにつ!？」

こんな男たちを相手に快樂を感じているのか?
自分に言い聞かせ必死に抵抗していたが
体は正直に反応してしまう

イルダ「ああああっ、中には…だめええっ!？」



男の精液がドクドクとイルダの子宮へと流れ込む
全身をビクビクと痙攣させ喘ぐイルダ

中出しは厳禁という約束であったはずだが…

イルダは自然と射精を受け入れうっとりとした表情を浮かべていた

夜が明けるまでに3人の男たちから何度も中出しされ

イルダは我を忘れて快楽を楽しむことになる

エイミー「あはっ…奥にっ…子宮がっ…あぁっ!？」

極太の肉棒が根元まで挿入されると
子宮が押し上げられる

エイミー「あはぁっ…体が熱いっ…この感覚…あぁあぁぁっ!



混乱したまま限界を迎えてしまったエイミー
潮を大量に吹きあげ声を上げ続ける
同時に男はエイミーの膣内に大量に射精していた

絶頂を迎え頭の中が真っ白になっていたエイミーは
男の射精をそのまま受け入れてしまった

エイミー「あはあっ…あああっ……。」

はじめての快感に口から声が溢れ続ける
男はそのエイミーの姿に満足したようにゆっくりと立ち上がり
部屋の扉を開けた…
そこには先ほどまでイルダを抱いていた男の姿があり
入れ替わりに部屋の中へと入ってくる

「さあ、次は私の番だよ…？」

エイミー「は…はいっ…。」

その日…二つの寝室からは喘ぎ声が止まることなく続いていた

EPISODE 04

本部での会議を終え…様々な事件と代償を得て
ミナト「ペニーウォート」所属のAGEたちの権利と
「フィム」の管理を勝ち取ったイルダ

翌日も男たちの相手を散々していたらしく

キャラバンへと戻ってきた彼女は疲れ切った様子であった
エイミーもしばらくはオペレーターとしての仕事を休むらしく
最終的に思い通りの結果を掴むことができたとはいえ
二人は大きな代償を払う結果となった

フィム「……。」

高台の上でキャラバンを見つめるフィム

ある程度の自由を得て外へと遊びに出ていた

フィム「フィムも…おかあさんといっしょに遊びたい……。」

主人公のことを「おかあさん」と呼び慕うフィム…
彼女は主人公やアリサが
アラガミに犯され楽しそうにしている様子を見て
その輪に混ざりたいとずっと思っていたようだ

主人公たちが一緒だと絶対に遊ばせてもらえない…

フィム「おかあさんたちだけ…ずるいっ！」

フィムは自らの意志で
引き寄せられたアラガミ「グボログボロ」へと近づいていった



ひっ…あああっ!!
すごい…気持ちいいっ?
あはああああんっ!!

ズチッ

ズチッ

フィム「はあ…あああああっ…!??」

グボロに秘部を舌で舐め回され喘ぐフィム

想像していた楽しさとは少し違っていたが…
初めて感じる快感に口元は笑っていた

各地で次第にその存在が確認され公になっていく「発情種」

先日の本部の会議でも大きな議題の1つとなった
数時間に及んだ議論の末に結論は出なかった

かつて極東で確認されて以降調査を続けてきたアリサの
意見も述べられたが
既にアラガミに魅了されたアリサの意見は
議論内容と微妙にずれておりあまり参考にはならなかった

「どちらにせよアラガミが敵であることに変わりはない！」

「たとえ灰域種であろうと発情種であろうと…始末するのみ！」

本部の意見はより危険度の高い
灰域種を警戒すべきという意見で一致しており
女性を襲うが…
決して殺さない発情種など二の次といったものであった

アリサ「まあ、それが当然の結論ですね…。」

主「発情種が殲滅されたら…私たち困るもの…ね。」

アラガミ相手にしか興奮できなくなった女たちは
今回の会議の結果に納得している様子だったが

ルル「発情種など二の次か…。」

クレア「また…犯されてしまいます…。」

またアラガミに犯されてしまうことを予見し
深いため息をつく二人…

その4人の間で表情を伺うフィム…

フィム「どうしてクレアとルルは嫌そうなの…？」

クレア「えっ…嫌…なのは当然のことですよ。」

ルル「好きなほうがおかしい…フィムもわかるでしょ？」

フィム「え～、気持ちいい事なのに…？」

その言葉を聞いて二人は考え込んでしまった

思い出したのはアラガミに弄ばれ激しくイカされた瞬間
あまりにも激しかった為、意識もうろうとしていたが
たしかにあの時感じたのは快感だった

クレア「たしかに…気持ちよかったかも…しれませんが…。」

ルル「でもだからって…あの二人のようには…。」

アリサ「ウロヴォロスって知ってます？

触手に拘束されて…もうすごいですからっ！」

主「触手っ！？

そんな…触手に二穴同時に攻められたりしたら…あああっ！？」

フィム「あああっ！？」

興奮し体もくねらせる主人公とそれを真似しているフィム

フィムにとってこれも遊びの1つであるようだ

同僚であるユウゴやジークは

女性たちに負担をかけないようにと任務に出向いているために
女AGEたちの会話に遠慮はなかった

イルダ達キャラバン一行は
自分たちが管理するミナトへと帰還するために旅路を急ぐ

イルダ「…航路予定地域にアラガミの反応は？」

エイミー「……反応は僅かですね…
警戒するほど大きな反応は付近にありません。」

イルダ「ふむ…アラガミがない…これも異常事態だな…。」

キャラバンは来た道を引き返すようにミナトへと向かう
通常ならばアラガミ反応で溢れている地域だが
その反応はごく僅かに限られ、討伐の必要がないほど
旅路は平穏であった

本部へと向かう際に一通りのアラガミ討伐を行っていたが
それから既にかかなりの時間が経過している…
この反応の無さは異常事態であった

エイミー「そういえば…この辺りって…。」

イルダ「どうした？」

エイミー「あ、いえ…
たしかアリサさんたちがアラガミに襲われちゃっ
た地点に近いかと思ったんですが…。」

イルダ「たしかに…なにか関係があるのだろうか…？」

エイミー「遅くなりました。」

イルダ「うむ…それでどうだった？」

エイミー「はい…イルダさんの想像した通りの結果が出ました。」

イルダ「……………」

アラガミ反応の少なさをエイミーに調査させたところ
以前にアリサやAGE達のアラガミに弄ばれた地域では
その後、アラガミによる敵対行動が減少しているという結果が出た

特にイルダがオーナーを務めるミナト近辺は
滞在中にアリサと主人公がアラガミと何度も交流した結果
現在ではほぼアラガミ反応が無くなっているという

イルダ「無関係とは思えない…。」

エイミー「でもいったいどういう関係が…。」

アラガミが性欲を満たして賢者となっているはずもない
だが、人間との交尾を得て何らかの変化が
アラガミに起きていることは間違いない
それが、性欲を満たしたことによる凶暴性の低下なのか…
または縄張りを変えただけなのか…
交尾という新たな捕食形態へと進化した可能性もある

イルダ「あらゆる可能性を想定して調査していく必要があるな…。」

エイミー「で…でも調査となりますと…

AGEの皆さんにアラガミに犯されてこいと…
言うようなものなのでは？」

イルダ「…そんなこと言える訳がない…な…。」

AGE達の責任者である自分が
そんな非道な任務を与えることなど許されない…
馬鹿な考えだったとイルダは自分を恥じた…しかし

主「その任務、私たちが引き受けますっ！！」

扉を勢いよく開き主人公とアリサが部屋へと勢いよく飛び込んできた

アリサ「私たちならその任務に適任だと思います！」

イルダ「き…聞いていたのか…お前たち…。」

目を輝かせイルダを見つめるアリサと主人公
そしていつの間にか二人に並んでいるフィム
3人の目はこの荒廃した世界で見ることができないほどに
純粹で澄んだ瞳だった…

イルダ「わ…わかった検討してみるとしよう…。」

その瞳の前でNOと言う事ができなかった

主「お任せくださいっ！ルルとクレアも同行させますね！」

アリサ「さあ、忙しくなりますよっ！」

フィム「たのしみ〜！」

イルダ「……………」

人間にもアラガミにも大きな変化が訪れている…
これどういう結末に繋がるのか…大きな不安に駆られるイルダだった…

数日後…

アラガミ達が多く生息する地域へと降り立った5人

主人公 アリサ ルル クレア そしてフィム…

フィムは参加する予定では無かったのだが
いつの間にかキャラバンを抜け出し隣に並んでいた

アラガミに弄ばれる…というありえない任務内容に
暗い表情を浮かべるクリアとルル…
しかし、最初に犯された頃と比べるとかなり明るく感じられる

主「じゃあ、計画通りにっ！」

アリサ「行きましょうっ！」

フィム「は〜い！」

ルル「……。」

クリア「……。」

5人は予定通りに対象のアラガミの元へと向かう…
発情種と思われるアラガミに襲われることが任務であるが
通常種の場合はそのまま討伐することが決められている

ルルとクリアは二人で対象のアラガミの元へと移動した

クリア「こいつはっ…！？」

ルル「間違いなく…発情種…だ。」

クリア「なんで…見ただけで解るんでしょうか…。」

ルル「たしかに…見た目は通常種と変わらないのに…。」

二人はアラガミを一目見るだけで発情種だと解った
外見では通常種となんら変わらないはずだったが…今は解る

同時に…体の中から熱くなる感覚…鼓動が高鳴ってくる

アラガミの股間から伸びる肉棒…それが目に入ると
いつの間にか股間を抑えて自慰行為を始めていた

混乱しパニックになった二人はその場を離れ…冷静になろうと努めた…

すると…

アリサ「あっ…あああああっ！????」

主「あああああっ！すごいっ！????」



アリサと主人公の声が聞こえてきた…
声というよりも悲鳴に近かったが…
岩陰から覗くと…
そこにはアラガミの肉棒が挿入され悶えるアリサと
主人公の姿があった

さらに…

フィム「ひあああああああっ!??」

灰域種「バルバルス」に抱えられ悶えるフィム

極太の肉棒に驚いている様子だが嫌がっている様子はない



アリサ「ああああっ…激しいっ…気持ちいいですっ!？」

フィム「あははあっ…すごいよっ、おかあさんっ!!」

叫ぶ二人の傍で必死にアラガミの肉棒をしゃぶる主人公
その光景を見たルルとクレアは…
いつのまにか下着をぐっしよりと濡らし呼吸を荒くし興奮していた

溢れる性欲を抑えきれなくなる…
彼女たちみたいになれば…どれだけ楽なのだろうか

快樂への誘惑に頭の中がいっぱいになる

アリサ「あはあああああっ!？」

フィム「ひゃあああああっ!？」





大量の潮を噴き上げたアリサとフィム

と同時にアリサと主人公の乳房の先端から噴き出した母乳

何が起きたのかは本人たちにも理解できなかった…

だが、その瞬間に感じたのは今までにない満足感だった

同時にアラガミの射精を受け精液で全身がべとべとになる主人公…

その光景を見ていた二人の性欲はもはや限界であった

クレア「あぁっ…わたし…がまんできませんっ！」

ルル「私も…体が…熱くてっ！！」

クレアとルルはアラガミの姿を求めて走り出した
溢れる性欲を満たすために…
これほどの性欲に襲われたことははじめてだった

そしていざ探すとなるとなかなか見つからないのがアラガミである

必死に走る二人の表情にも焦りが見せ始めていた

クレア「あぁっ…なんで…どこにもいない…。」

股間をぐっと抑えてうずくまったクレア

ルルのズボンはすでに溢れる愛液でぐっしりと濡れ
大きな染みが目立つ

ルル「私たち…一体どうなってしまったの…。」

なぜここまで快楽を求めているのか
困惑し動けなくなっていた二人の前に…
アラガミ「ヴァジュラ」
そして背後からは灰域種「ヌアザ」が現れた

アラガミに前後を挟まれたが…彼女たちに恐怖は無かった
灰域種が相手となれば二人では絶望的な状況…
だが二人はそれぞれ…
自分の正面に立つアラガミの肉棒に目が釘付けであった
はやくあれが欲しい…
思わず手を伸ばしてしまうほどに肉棒を求める

アラガミ達が近づき二人へと襲い掛かる
乱暴に扱われているように見えるが
通常の間人よりも強固な肉体を持つGE達にとって
これぐらひは何でも無かった

クレア「あっ…あああああし!???»

ルル「うううっ!? 入ってきたああっ!?»





極太の肉棒を挿入され叫ぶ二人
二人の膣内は素直に肉棒を受け入れていた
自分達でも驚くほどに苦痛を感じることは無く
膣壁を押し広げ挿入してくる快感に酔いしれる

クレア「き…きもちいいっ…あああっあし!?!」

ルル「奥まで届いてる…あはあっ!?!?!」

激しい腰使いで二人を攻めるアラガミ達…
愛液が溢れ周囲に飛び散る…
二人はその様子を喘ぎながら愛おしそうに見つめていた

体をビクビクと震わせ潮を噴き上げる
まるで全身で喜びを表現しているかのように

クレア「あああああああっ!？」

ルル「ひあああああああっ!？」

もはや理性など無い
クレアとルルの二人は
もはや言葉にもならないほどに快楽に喘ぎ続け
ただ快楽に身を捧げ続ける

そして大量の精液が射精され二人の腹部は大きく膨らんでいった…

クレア「あがっ…あああああっ!??」

ルル「うあああっ…あああっ!??」





射精され腹部が膨らみきった時…

二人の乳房から溢れてきた母乳…

まるで妊娠しているかのようなその姿はどこか神秘的に見える

妊婦のように腹部を膨らませてぐったりと倒れ込んだ二人…

さらにその横にはアリサと主人公…フィムの姿があった

秘部から精液を垂れ流しぐったりとしたまま動かない5人

アラガミ達に囲まれた彼女たちは

今まで見せたことがないほどに幸せな表情を浮かべていた…

それはまるでその膨らんだ腹部に新たな子を宿しているかのように…

イルダ「では…想像した通りの結果が出たというわけか。」

エイミー「はい…そのようです…。」

イルダ達が想像した通り…

AGE達が体を捧げアラガミと交流した地域では
極端にアラガミによる襲撃が激減することとなった

アラガミ自体はいるが…凶暴性が薄れており
ミナトやキャラバンへの襲撃も激減した…

イルダ「これは…アラガミに対する新たな対策と…なるのか？」

エイミー「ほ、本気ですか…！？」

イルダ「いや…もちろんそのつもりはない…だが。」

イルダはモニターに映るAGE達の姿を見つめる

その先には今まで見せたことがない彼女たちの笑顔があった
命を賭けアラガミと戦う日々を送っていた彼女たちにとって
大きなストレス解消の機会となった様子だ

彼女たちの姿を見ていると…

こんな非道な作戦が…もしかしたら悪くないのかもしれないと
考えさせられてしまう

少なくとも、今彼女たちから快樂を得る奪ってしまえば…
彼女たちは二度と立ち直れないかもしれない

イルダ「……これからも調査として…

彼女たちには調査を続けてもらうしかない…のか…。」

エイミー「はあ…なんだかこの先が心配です…。」

アラガミに対する襲撃は防いでいるものの…
その理由を解明する糸口さえ見えていない

AGE達のストレス解消をしつつ調査を続行するしかない
そう決断したイルダは椅子に体を預け深くため息をした…

アリサ「なんだか…とても良い気分ですね…。」

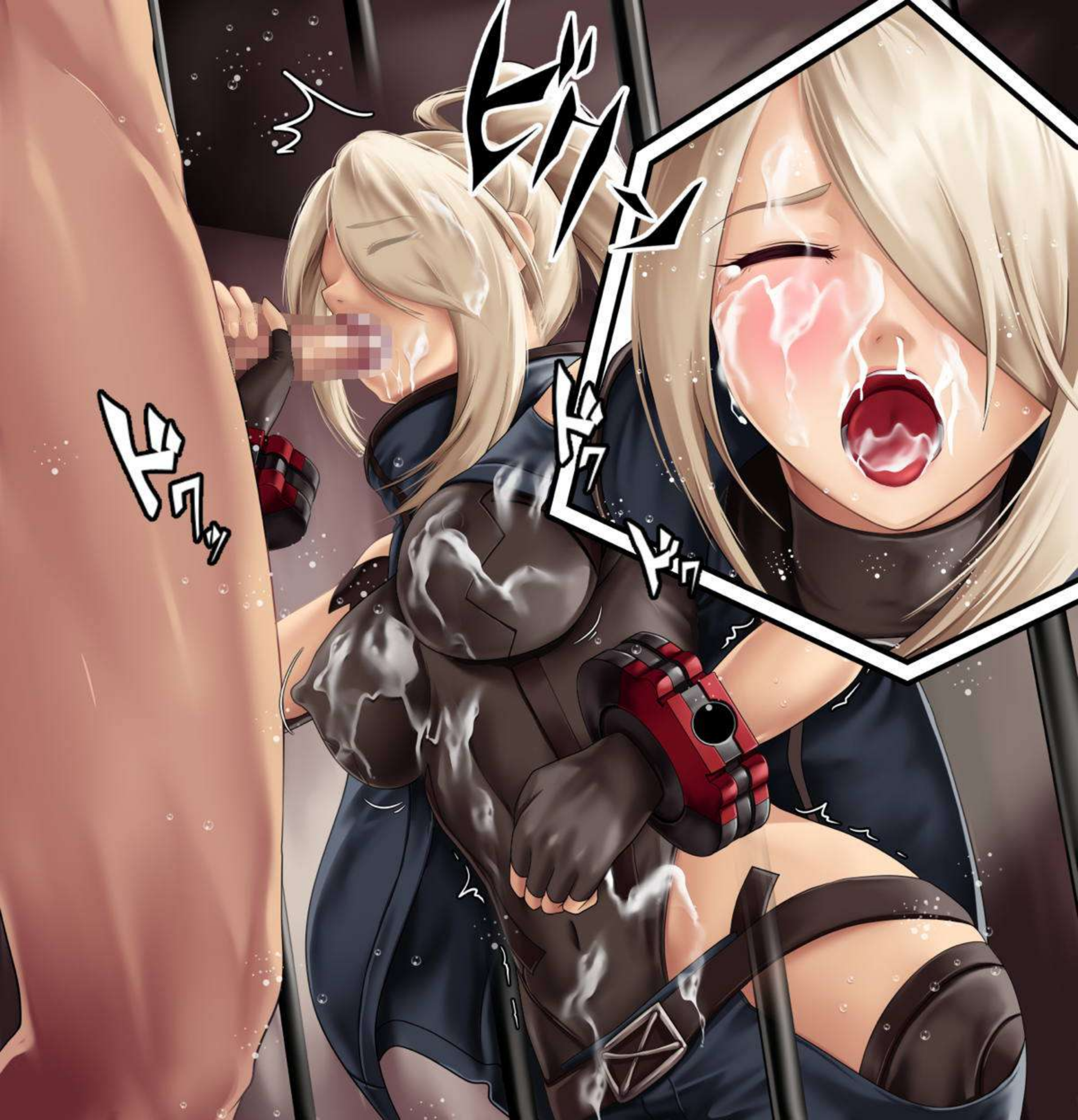
主「ええ…満たされたというのかな…。」

そっと腹部を撫でる二人…
フィムもその隣で笑顔で二人の腹部をそっと撫でていた

続く…？

to be continued?







うっ…あぐっ…
また…今日も…
うあっ…
奥に…当たってるっ…!?

ん

ん

ん

ん

ん

ん

ん



モグッ

モグッ

うっ…あああっ!?
また…中に…っ…
あはあああっ!?

ああああああっ!!
なに...この感覚...
中に...出てるっ!!
ダメ;つイっちやうっ!!

ゴッ

ゴッ

ゴッ





ズズズズ

ズズズ

ズズズ

いっ…いやああっ!!
アラガミが…私の中につ
ダメ…痛いっ…そんな奥までダメですっ!



あがつ...!!
中に...出てるっ...
だめ、あああ!!
おなかが...っ...



ひいっ...!!
太いのが...私の中につ...!!
あああつ、気持ちいいっ!!

ブツッ
ズン

ブツッ
ズン





あがつ!!
あはあああ!!
頭が...おかしくなるっ...!!

アッ
アッ

アッ
アッ



あっ…ああああっ!!
すごっ…いんですっ…
私の中に…入ってきてます…!?

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ



あはあっ!?!
すごい…こんな
たくさん出てるっ…
もっと…出してくだ
さいっ!?!

ズンズン

ズンズン

あああつ!!
いやっ…また…アラガミに…
おかされるなんて…!!
ああ…ダメツ!!

ズン

ゴキウ

ゴキウ

うあああああつ!?
中に…出てる…
いやっ…妊娠…しちやうっ…?

ゴキウ



ああああっ!!
やめて…お願い…これ以上は
耐えられませんか!!

ズッ

グッ



あはあああっ!?!
もうダメ…
力が入らないっ…!!
そんな激しくしないでえっ!?!

太太

ううっ…あああ!!
そんな…激しくしないです…
あああっ…!?

ハッハッ

太太

あつ…あがつ…!?
な…中にはダメエツ…!?
うっ…うぐっ…
中に出すなんて…こんな仕打ち…

ゴキ

ゴキ





あっ…あはああっ!?
こ…こんな感覚…はじめて…
ダメ…もう私…っ…!!

ピャアアア

ひっ…あああっ!!
すごい…気持ちいいっ?
あはああああんっ!!

ズ
チ
ズ

ズ
チ
ズ





あああっ!?
すごい…太いっ…!!
もっと…私の中に…挿れてっ!!

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ

ズ
ズ
ズ



カッ
カッ

ド
ド
ド

ド
ド
ド

あはあああああっ!!
中に出てるううっ...!!
ああっ...もつと...もつと
くださいっ!?



あああっ!?
はやく…私の中…
に…くださいっ!!
もっ…と奥まで…
私の中…に下さいっ!?

ズ
ン

ズ
ン

ズ
ン

あっ…あががあっ!!
うあっ、すごいっ…!!
気持ちいい…もっ…もっ…
私の中に出してくださいっ!!

気持ちいい

気持ちいい

あっ…あああっ!!
アラガミの…やっぱりいいっ…!!
これがないと私は…っ…!!





ああっ…おかあさんっ…
すごいよっ…!?!
わたしもおかあさんと同じっ!!

ズ
チ
ズ

ズ
チ
ズ





あああああつ!?
ひあああつ!?
お腹が…すごいよっ!?

ア
ア
ア

ア
ア
ア































































































































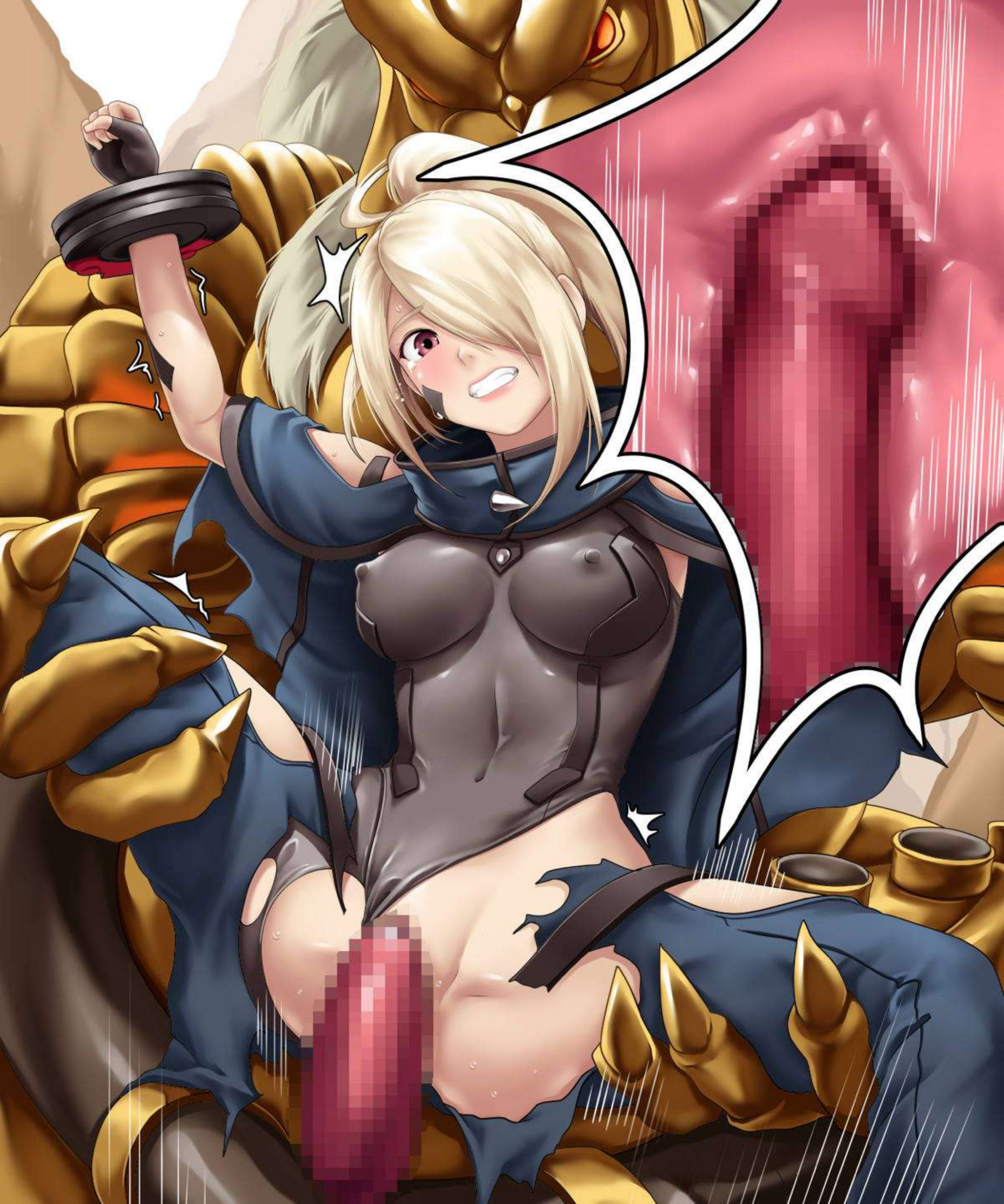










































































































































































































































































































































































































































コミックブイーター3CG集発売中!



コミックブイーター3CCG集発売中!



コミックブイーター3CG集発売中!























































